安足地区スポーツクラブの推移

―― 昭和59年度～平成２年度のクラブ員数を追って ――

栃木県教育委員会事務局安足教育事務所
関　口　伸　一

1．は　じ　め　に

平成元年11月に国の保健体育審議会が，「21世紀に向けたスポーツの振興方策について」という答申を出した。栃木県においてもそれを受けて平成２年11月に同様の答申を出し，具体的な施策を講じるに至っている。その中で生涯スポーツの重要性が叫ばれ，特にスポーツの日常化・生活化を一層推進させるためには，計画的・継続的活動の基盤となるスポーツクラブの育成を図る必要があるとされ，スポーツクラブ活動をより一層活発にすることが要求されている。

安足地区においては，佐野市・葛生町・田沼町・足利市の二市二町が常に先見性を持ち地域の実情に応じて社会体育の振興を図っている。そして，市・町民が生涯にわたり，年齢や適性に応じて「いつでも・どこでも・だれでも」スポーツを楽しみ，健康・体力を保持増進することができるよう「市・町民ひとり１スポーツ」をスローガンに推進している。

そこで，この機会にクラブの現状を把握し，それぞれの市・町や人に合ったスポーツ活動の今後の方向性を見出すことは極めて重要である。クラブ員数の増減だけでスポーツ活動が活発か否かを判断するのはやや問題もあるが，数字として表れてくるものであるから比較し易い。また，クラブ数だけでなく内容的なものへと発展して見ていくことにより，クラブの衰退が理解でき，その市町の日常的なスポーツ活動の動向が推察できる。さらに，市・町段階で総合的に検討・考察を加えていくことにより，その市・町の特徴が明らかになり，今後の進むべき方向が自然に見い出されてくる。ここでは，読み取り易くグラフ化し，考察を加えた。

なお，ここに表された数字は，すべて二市二町から毎年５月１日現在で報告されてきたものである。

2．人　口　の　推　移

（毎年４月１日現在）

	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市	80,900	81,235	81,644	82,135	82,582	83,074	82,818
葛生町	15,837	15,235	15,251	15,078	14,877	14,669	14,464
田沼町	29,919	30,521	30,548	30,596	30,640	30,307	30,347
足利市	166,427	166,536	167,539	167,755	167,777	167,692	167,652
合　計	293,083	293,527	294,982	295,564	295,876	295,742	295,281

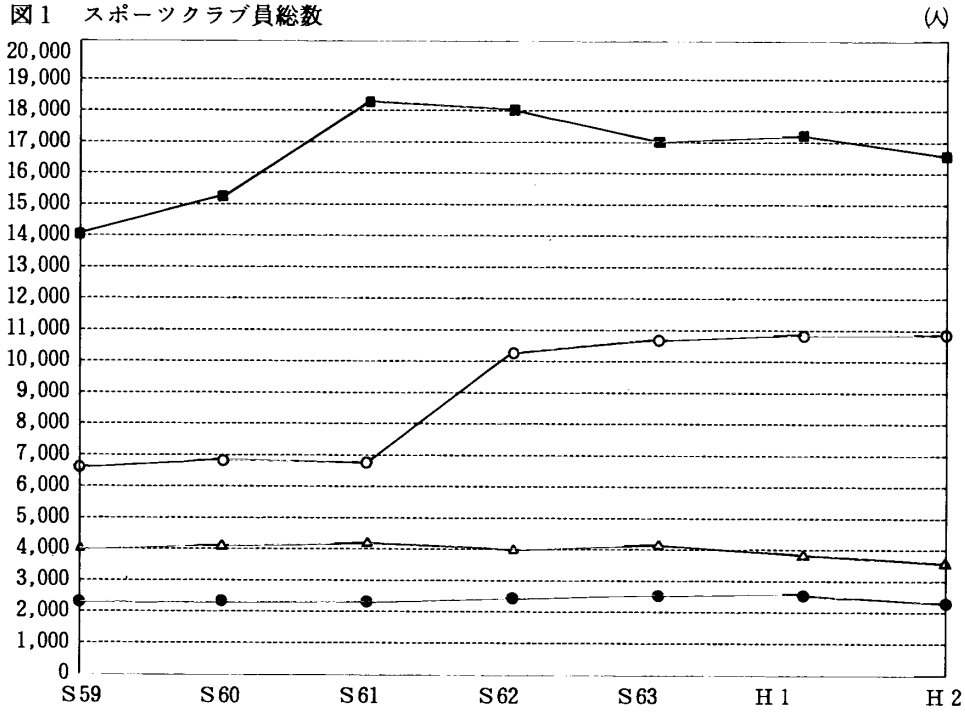
人口の推移をみると，安足地区全体ではここ７年間大きな変化はみられない。佐野市は平成元年まで，徐々にではあるが毎年増加している。葛生町は，昭和59年から平成２年まで毎年100人～150人の人口減になっており，やや過疎化傾向がみられる。田沼町は昭和59年～昭和60年の１年間で602人と最高の増加を示しているが，その後あまり変化がみられない。足利市は，昭和63年までは増加傾向にあったがそれをピークとして平成元年・２年と減少傾向にある。それらの推移を考えながら各スポーツクラブ員の増減をみてみることにした。

３．スポーツクラブ員数の推移を追って

(1) スポーツクラブ員総数（図１）並びに人口に対する割合（図２）から

スポーツクラブ員総数と人口に対する割合の最大値と最小値の年度が，佐野市・田沼市・足利市は一致するが，葛生町だけは異なる。葛生町では，総数が最も多かったのは昭和63年度の

図１　スポーツクラブ員総数

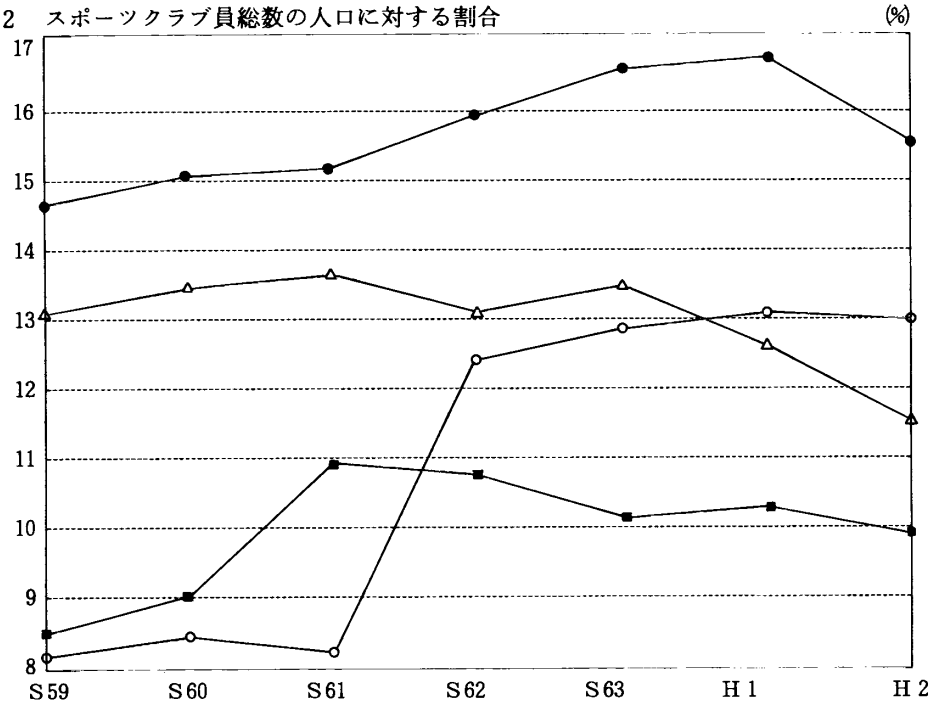


	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	6,609	6,863	6,719	10,210	10,617	10,871	10,827
葛生町●	2,325	2,296	2,315	2,402	2,466	2,456	2,235
田沼町△	3,993	4,105	4,165	4,017	4,124	3,824	3,511
足利市■	14,143	15,304	18,269	18,040	17,030	17,231	16,634

2,466人であるのに対し，人口に対する割合が最も高いのは平成元年度の16.74パーセントである。また，最もクラブ員数が少なかったのは平成２年度の2,235人であるが，人口に対する割合は昭和59年度が14.68パーセントと最低の値を示している。これは葛生町において人口が毎年減少していくにもかかわらずクラブ員数の増減があまりないことを示している。クラブ員の固定化現象があると思われる。

人口に対する割合がひと桁なのは，二市６年間である（佐野市Ｓ59～Ｓ61と足利市Ｓ59・Ｓ60・Ｈ２）。人口の多い市においてはクラブ員数を増員させていくことがいかに大変であるかがわかる。なお平成２年度における県全体の人口に対するクラブ員数の割合は，11.3パーセントである。この数字を目標にし，今後具体的な手だてを講じていくことが市町民ひとり１スポーツにつながることになる。

図２　スポーツクラブ員総数の人口に対する割合

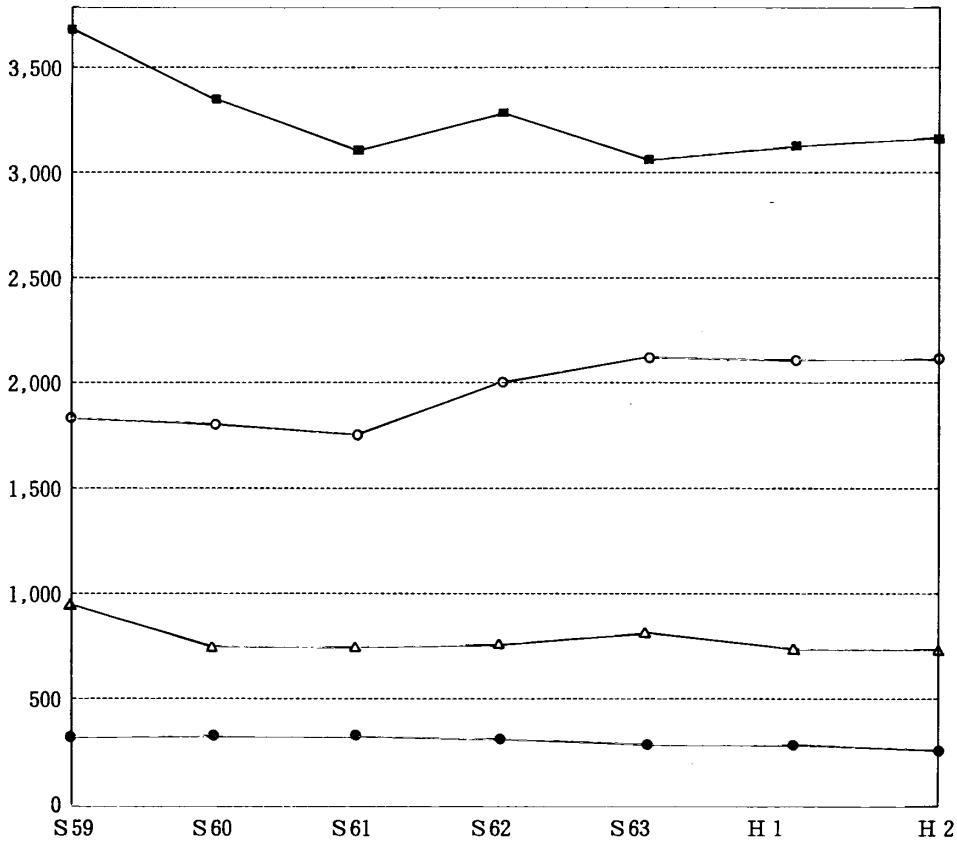


	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	8.17	8.45	8.23	12.43	12.86	13.09	12.97
葛生町●	14.68	15.07	15.18	15.93	16.58	16.74	15.56
田沼町△	13.09	13.45	13.63	13.13	13.46	12.62	11.54
足利市■	8.50	9.03	10.90	10.75	10.15	10.28	9.92

(2) **野球クラブ員数（図３）・スポーツクラブ員総数に対する割合（図４）**

野球クラブ員数においては，各市町とも全体的に昭和59年度，60年度をピークとし，減少傾向にある。最近は女性の野球クラブも出現しつつあるが（安足地区は男性のみ）野球というスポーツの特性を考えるとまだまだ男性のスポーツであり，20歳代・30歳代を中心に行われている。安足地区では，せいぜい40歳代半ばくらいまでで第一線から退いてしまう傾向で，それと同時にスポーツ活動を中止してしまう人が多いようである。移行していく人の中で最も多いのは野球⇨ソフトボールのパターンである。

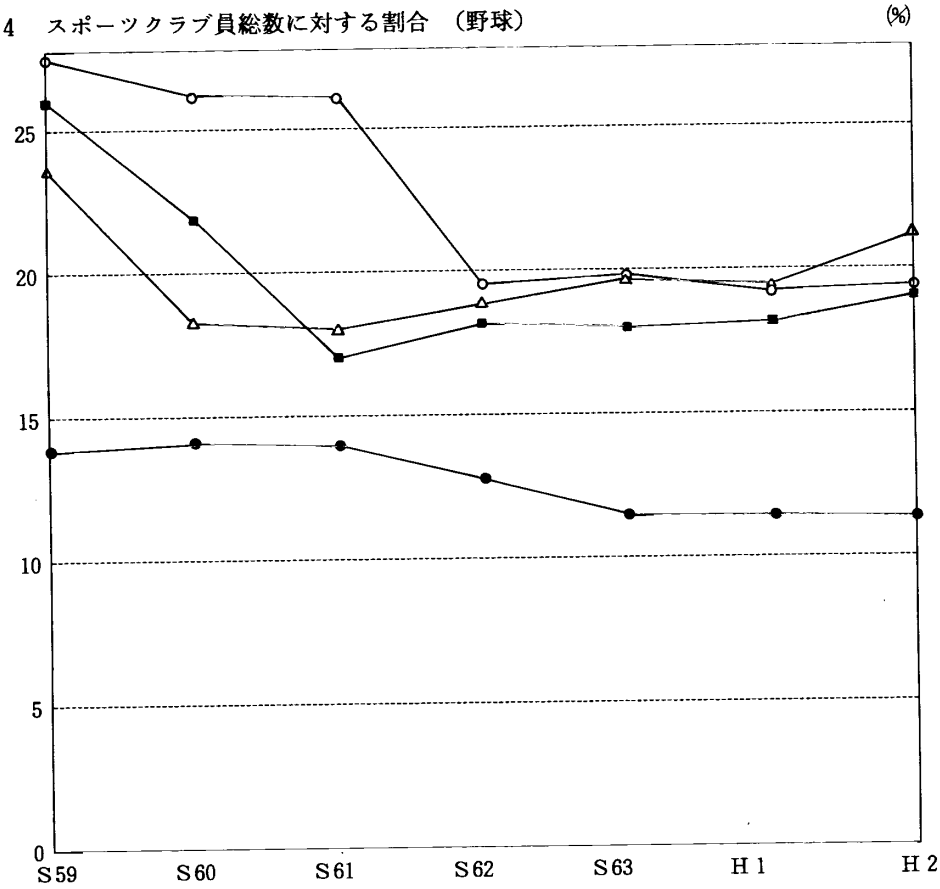
図３　種目別スポーツクラブ員数　（野球）　(人)



	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	1,830	1,800	1,755	1,998	2,106	2,096	2,105
葛生町●	323	324	324	308	284	282	254
田沼町△	943	751	751	760	815	746	746
足利市■	3,679	3,349	3,119	3,284	3,069	3,135	3,168

どの市町でも若年層（特に20歳代）の男性のスポーツ離れ，特に自分中心の展開ができにくい集団的スポーツ離れが最近の傾向として見られる。また，この割合を見ていくと，若年層人口の薄い葛生町では全体的なパーセンテージも低いようである。平成２年度の県全体の割合は23.99パーセントであり，二市二町よりも高い数値である。安足地区では今後も減少傾向をたどることが予想される。

図４　スポーツクラブ員総数に対する割合　（野球）



	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	27.69	26.23	26.12	19.57	19.84	19.28	19.44
葛生町●	13.89	14.11	14.00	12.82	11.52	11.48	11.36
田沼町△	23.62	18.29	18.04	18.92	19.76	19.51	21.25
足利市■	26.01	21.88	17.07	18.20	18.02	18.19	19.05

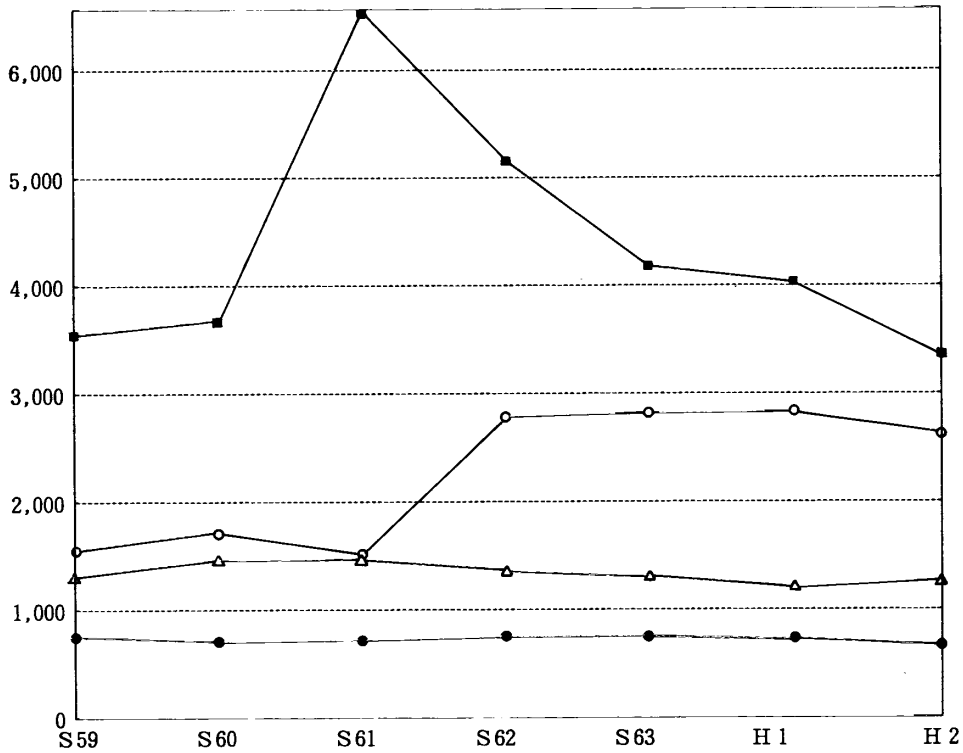
(3) ソフトボールクラブ員数（図５）・スポーツクラブ員総数に対する割合（図６）

ソフトボールクラブ員数は，葛生町・田沼町・足利市においてこの７年間，野球クラブ員数よりも上回っている。

葛生町では，７年間大きな変化はみられないが，毎年野球クラブ員の約３倍のクラブ員数をほこっている。これは，全体的に青年層が薄いことが影響していると思われる。

田沼町は，毎年総クラブ員数に対する割合が常に30パーセント以上で，男性のクラブ員がほとんどである。ソフトボールは町の男性の日常的なスポーツ活動になっているようである。また，平成２年度から昭和59年度のパーセントを引くと田沼町だけがプラス3.34ポイントになる。平成２年度は，この７年間で最も高い36.77パーセントを示して盛んに行われていることが

図５　種目別スポーツクラブ員数　（ソフトボール）

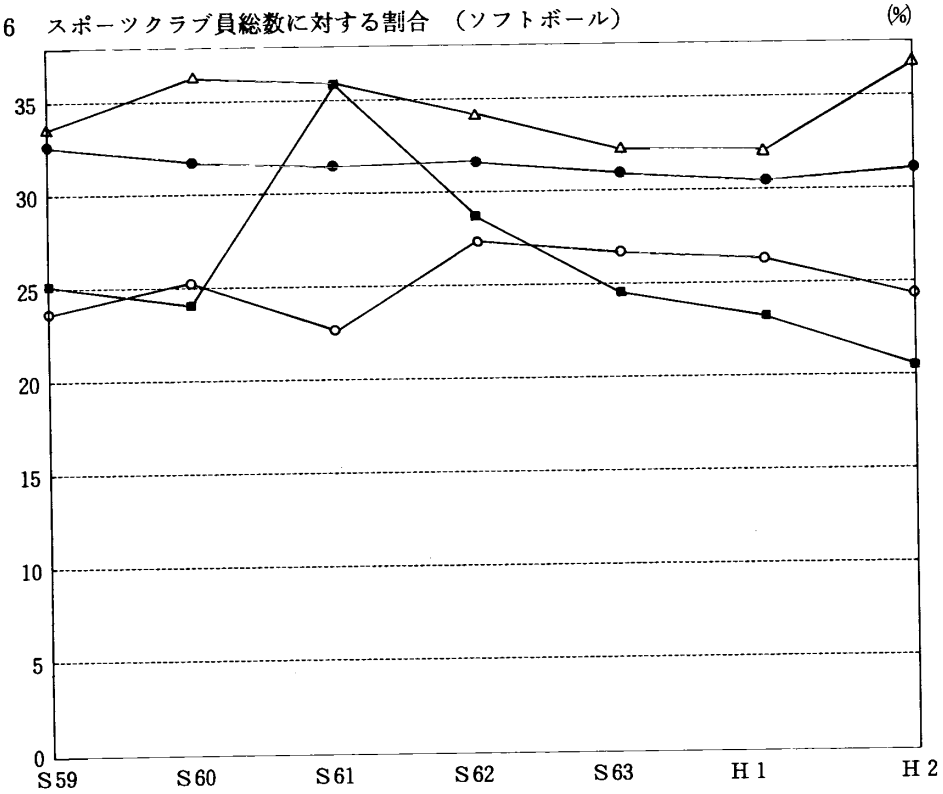


	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	1,566	1,728	1,530	2,786	2,831	2,857	2,643
葛生町●	756	728	728	760	764	749	696
田沼町△	1,335	1,490	1,490	1,370	1,330	1,230	1,291
足利市■	3,549	3,688	6,555	5,159	4,192	4,026	3,375

うかがえる。

足利市においては，昭和61年度をピークにして年々クラブ員数が減少し，平成２年度が過去最少の3,375人で，総クラブ員数の20.29パーセントとなっている。クラブ員数は最多時（昭和61年度）の51.49パーセントと約半数に減り，他のスポーツクラブにはみられない大幅な減少になっている。ソフトボール離れ現象が顕著に起こっている。ソフトボール人口をどのようにしてもう一度増すか，ソフトボールから離れた人たちを他のスポーツ種目へどううまく移行してスポーツ活動を継続させていくのか，行政側の対応もせまられる段階にきているのかもしれない。

図６　スポーツクラブ員総数に対する割合　（ソフトボール）

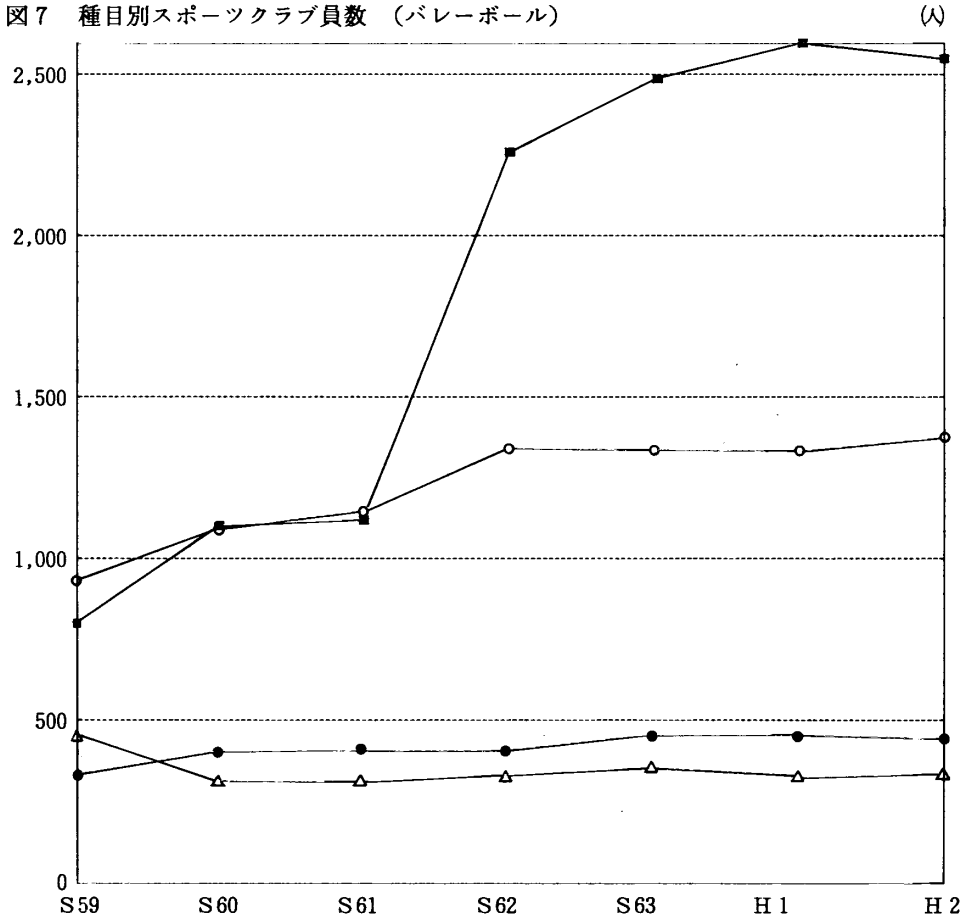


	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	23.69	25.18	22.77	27.29	26.66	26.28	24.41
葛生町●	32.52	31.71	31.45	31.64	30.98	30.50	31.14
田沼町△	33.43	36.30	35.77	34.11	32.25	32.17	36.77
足利市■	25.09	24.10	35.88	28.60	24.62	23.36	20.29

(4) バレーボールクラブ員数（図７）・スポーツクラブ員総数に対する割合（図８）

野球・ソフトボールが男性の日常的なスポーツ種目であれば，バレーボールは女性の日常的スポーツ活動種目といえる。なぜならば，平成２年度においては，安足地区全体で男性が604人でスポーツクラブ員総数の12.81パーセントであるのに対して，女性が4,111人で87.19パーセントと約９割近くが女性である。特に足利市においては，バレーボールクラブ員総数に対する女性の占める割合が96.78パーセントと最も高い値を示している。昭和61年度までは横ばい傾

図７　種目別スポーツクラブ員数　（バレーボール）

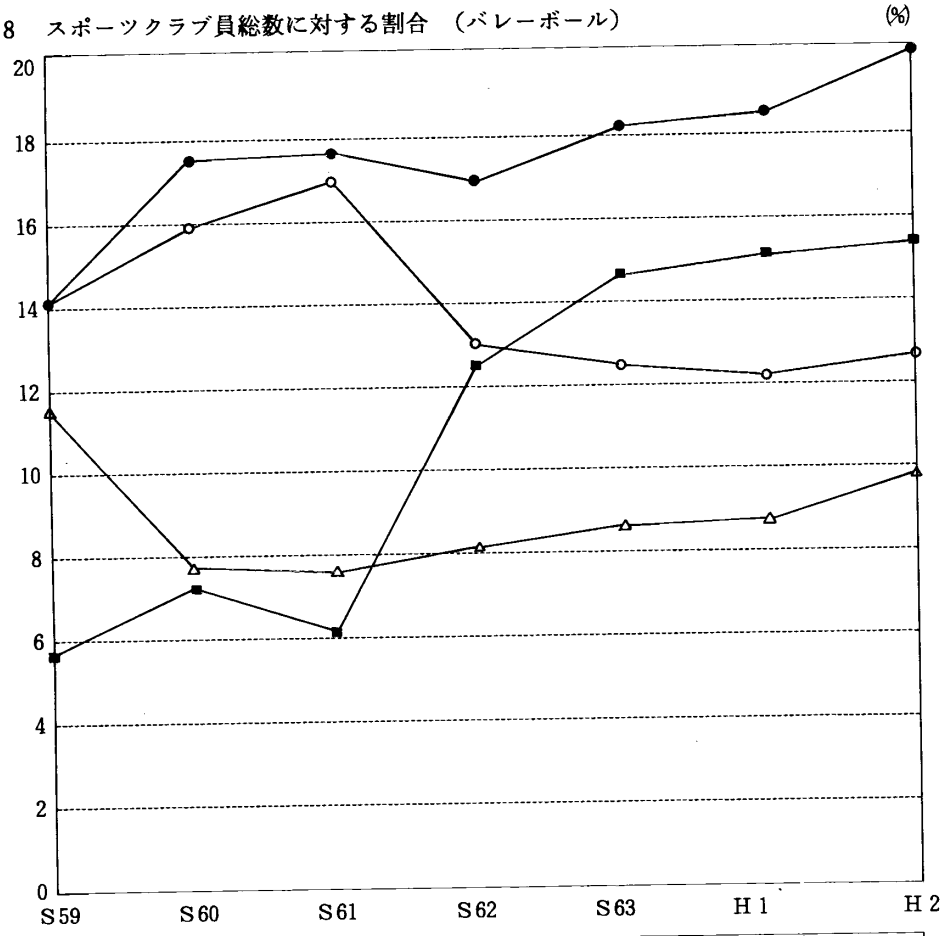


	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	927	1,090	1,140	1,333	1,330	1,331	1,374
葛生町●	327	401	408	407	448	454	447
田沼町△	460	315	315	327	355	335	344
足利市■	796	1,098	1,116	2,260	2,489	2,599	2,550

向であったが，昭和62年度に前年度比202.5パーセントと２倍以上のクラブ員増になった。しかし，その後あまり変化はみられない。総クラブ員数に対する割合は着実に伸びている。

佐野市・葛生町・田沼町においては，７年間ほとんどクラブ員数の変動があまりない。これは，クラブ員の固定化現象が考えられる。新メンバーの確保や新しいスポーツ種目の紹介，普及も今後の課題になってくると思われる。

図８　スポーツクラブ員総数に対する割合　（バレーボール）

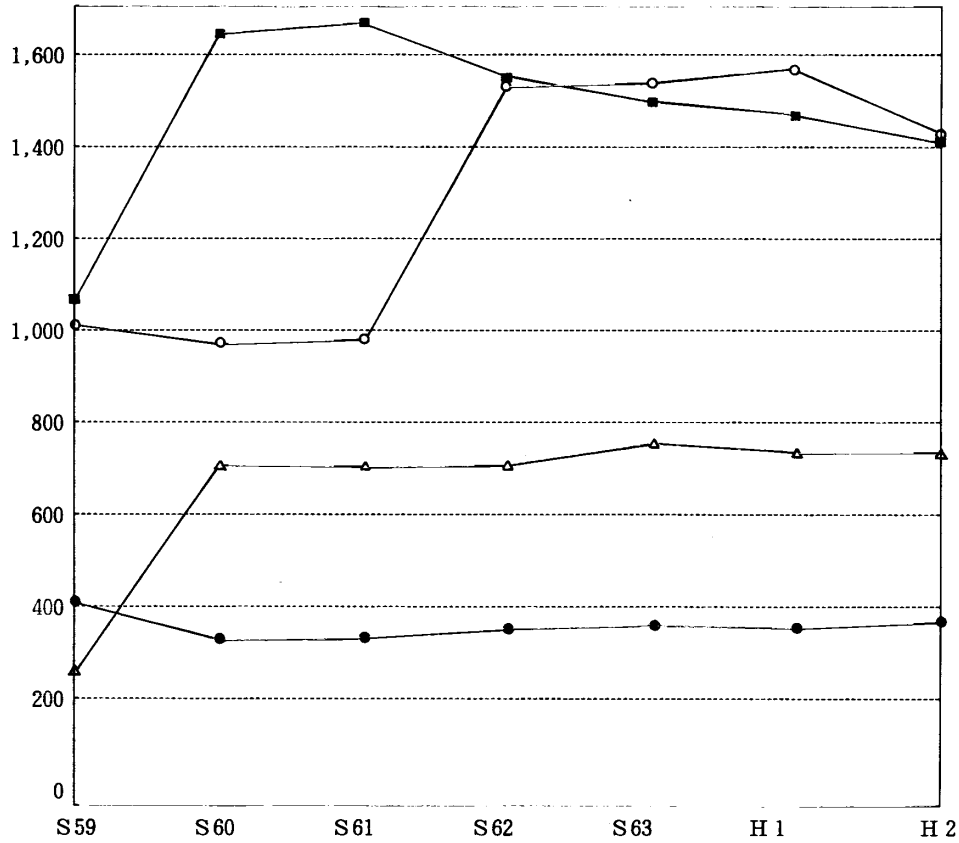


	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	14.03	15.88	16.97	13.06	12.53	12.24	12.69
葛生町●	14.06	17.47	17.62	16.94	18.17	18.49	20.00
田沼町△	11.52	7.67	7.56	8.14	8.61	8.76	9.80
足利市■	5.63	7.17	6.11	12.53	14.62	15.08	15.33

(5) ゲートボールクラブ員数（図９）・スポーツクラブ員総数に対する割合（図10）

田沼町においては，７年間で人数が2.83倍，総クラブ員数に対する割合は平成２年度から昭和59年度を引いてみるとプラス14.33ポイントと驚異的な伸びを示している。平成２年度は総クラブ員数に対する割合が20.79パーセントで他の市町にはみられない高い数値である。これは，ソフトボール・野球に次ぐパーセンテージであるが，ゲートボールという種目の特性や年齢層を考えると非常に高い。おそらく日常的にクラブに入って活動している年齢層は，60歳以上の高齢者の人たちであると考えられる。これらから20パーセントを超えるということは，い

図９　種目別スポーツクラブ員数　（ゲートボール）　(人)

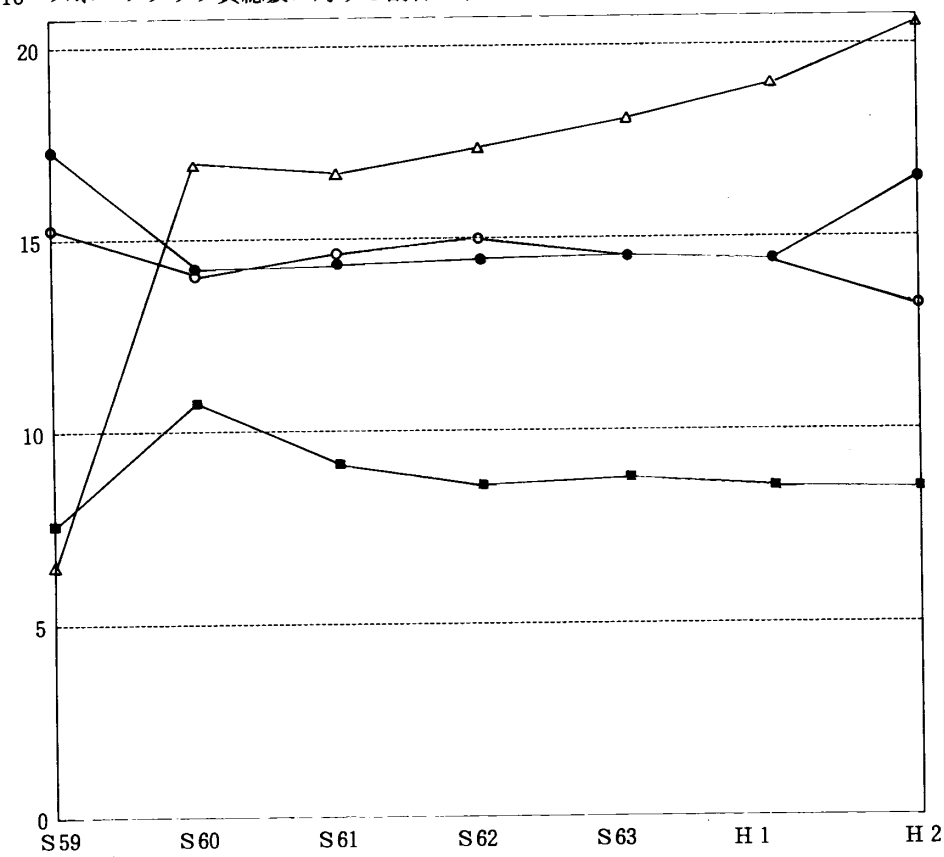


	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	1,008	972	981	1,530	1,538	1,538	1,432
葛生町●	403	327	331	346	358	355	370
田沼町△	258	699	699	700	750	730	730
足利市■	1,062	1,640	1,665	1,545	1,493	1,464	1,410

かに高い数値かがわかる。田沼町は，今後これらを特色に出して推進していくのか，それとも他の高齢者スポーツ種目の開発，普及に目を向けていくのか，住民のニーズをうかがいながら行政側の方針，対応が検討されなければならない。

他の二市一町は，横ばい傾向もしくは減少傾向にあるが，今後ますます高齢化していくことを考えると，先を見通した高齢者スポーツ活動の推進がなされなければならない。特に現在の40歳台が60歳台になるときには，最も高齢化現象が進む社会になるため，20年後のビジョンを今から考えておく必要がある。

図10　スポーツクラブ員総数に対する割合　（ゲートボール）



	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	15.25	14.16	14.60	14.99	14.49	14.41	13.23
葛生町●	17.33	14.24	14.30	14.40	14.52	14.45	16.55
田沼町△	6.46	17.03	16.78	17.43	18.19	19.09	20.79
足利市■	7.51	10.72	9.11	8.56	8.77	8.50	8.48

4．組み合わせによる考察（スポーツクラブ員総数に対する割合）

今までは四大派閥の個々のクラブ員数の増減・傾向・特徴等を考察してきたが，合わせてみるとどんな結果になるだろうか。そこで，最初に男性のスポーツクラブである「野球」と「ソフトボール」を組み合わせてみた。

(1)　（野球＋ソフトボール）のクラブ員総数に対する割合（図11）

図11を見ると７年間の経緯は，４～５パーセントの違いはあるが，佐野市と葛生市が全く同じ傾向で少しずつ毎年減少してきている。これはひとつに野球，ソフトボールクラブ員の固定化現象が現れていることであると思う。

田沼町は，二つ組み合わせると７年間，常に50ポイント以上になる。図８のバレーボールの数値と比較すると特徴が明確になる。これは，当町において女性よりも男性のほうがスポーツクラブに加入して，日常的なスポーツ活動が活発に行われているということである。今後女性の加入できるスポーツクラブの発足や女性の日常的スポーツ活動の活発化を図る手だてを考えることが急務となる。女性のスポーツ活動が活発になることによって親子のスポーツ活動やファミリー的スポーツ活動の活性化が図られ，ひいては町のスポーツ活動がより一層活発になるに違いない。

足利市においては，昭和62年度に52.95パーセントと半分以上を占めていたが平成２年度には40パーセントを割ってしまった。これにより男性のスポーツである野球・ソフトボール離れが確実に起こっていることがわかる。しかし，クラブ員総数の人口に対する割合（図２）は着実に増加している。では，野球・ソフトボールを離れた人たちはどのようなスポーツクラブへ移行していったのだろうか。これだけのデータでは分析できない。もう少し他の面についても調べでみる必要が出てくる。

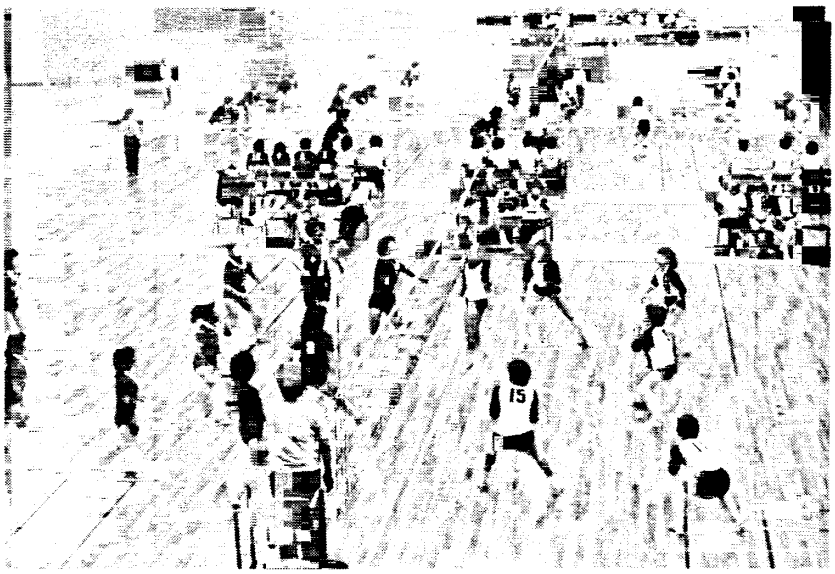
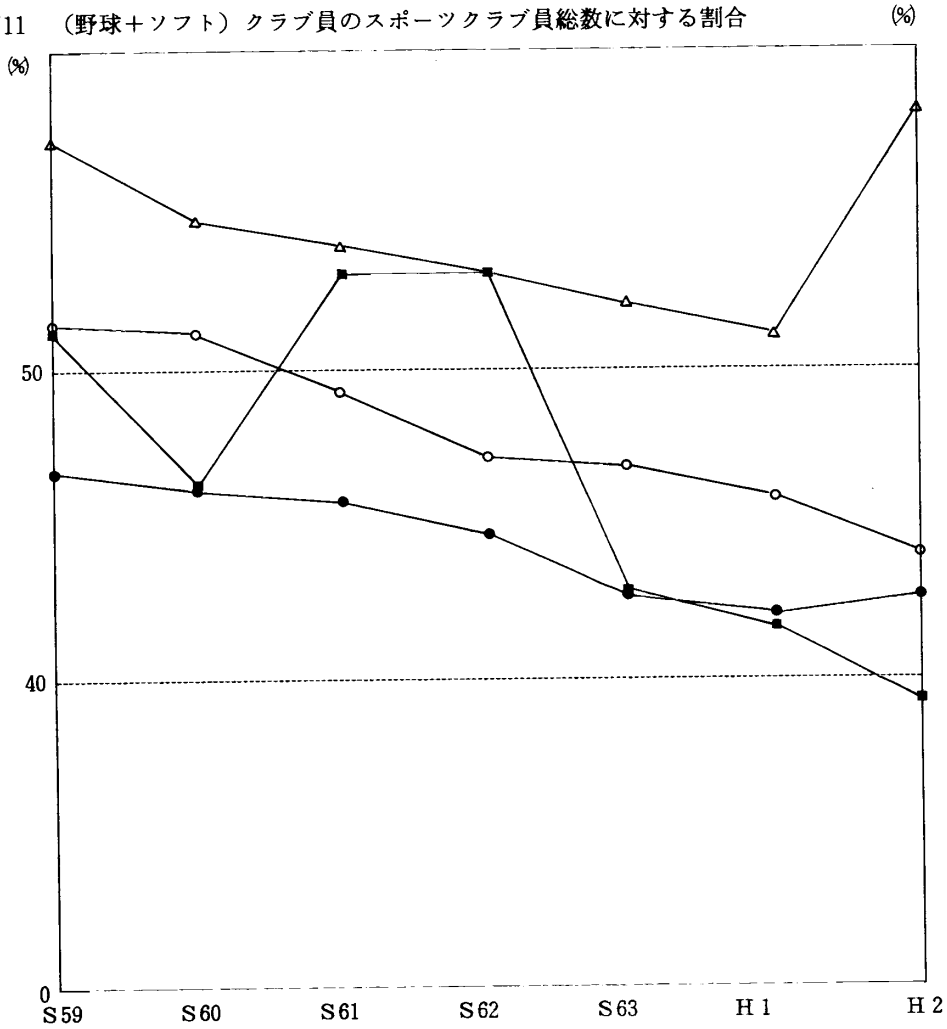


図11　（野球＋ソフト）クラブ員のスポーツクラブ員総数に対する割合



	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	51.38	51.14	48.89	46.86	46.50	45.56	43.85
葛生町●	46.41	45.82	45.45	44.46	42.50	41.98	42.50
田沼町△	57.05	54.59	53.81	53.03	52.01	51.67	58.02
足利市■	51.10	45.98	52.95	52.95	42.64	41.56	39.34

(2) （野球＋ソフトボール＋バレーボール）のクラブ員総数に対する割合（図12）

次に青年層・壮年層の男性のスポーツ活動種目である野球・ソフトボールと女性のスポーツ活動種目であるバレーボールとを組合わせて考察してみることにする。つまり，安足地区二市二町の20歳以上60歳未満の人が，全てのクラブ員総数に対して三種目でどれくらいの割合を占めているかを見たい。古くから行われている日本の日常的スポーツクラブ活動がどう変化してきているか知ることは大切なことである。

全体的に見ると，おもしろいことに市と，町でというように完全に二つに分れている。佐野市と足利市が同じような変化をしてきている。平成１年度・２年度それぞれの差は，1.16ポイント，1.87ポイントとほとんど差はない。葛生町と田沼町が昭和60年度から全く同じような傾向で平成２年度まできている。数値も常に60パーセント代でありほとんど変わらない。

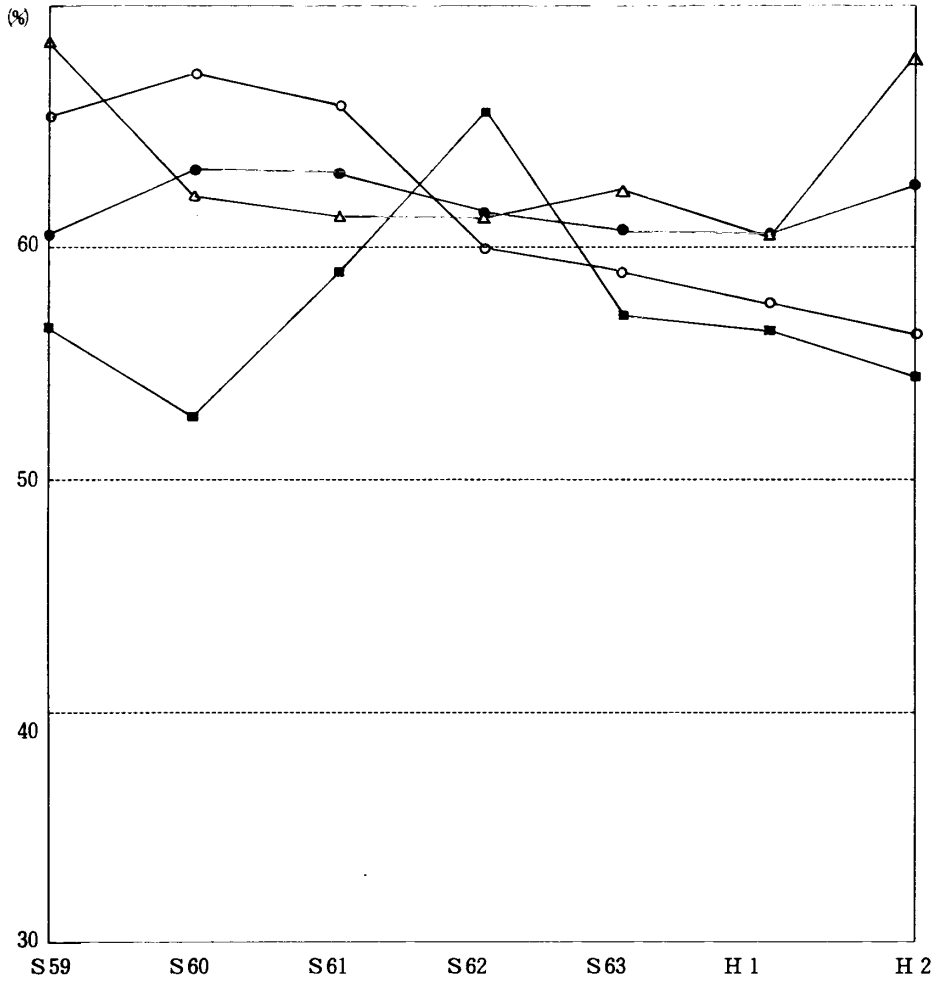
佐野市においては，図２にあるようにクラブ員総数は確実に増加しているにもかかわらず，徐々にではあるが毎年確実にこの割合が減ってきている。この現象は，今後も続いていくことと思う。この予想の根拠は，佐野市においてこれまでほとんどなかったニュースポーツのクラブが平成３年度から出現し，活動も始まり活発化しつつあるからである。また，野球・ソフトボール・バレーボールから移行することも考えられ，この部門の大幅なクラブ員増が見込まれることにもよる。

葛生町では，過去７年間の割合がほとんど変動しないできている。60パーセントから64パーセントの間でまとまっている。定着しているのとクラブ員の入替え等があまりみられないことと思われる。

田沼町は，それほど大きな変化はみられないが，三クラブを合わせると二市二町の中では，常に高い数値を示している。どちらかというと他の二市一町が減少傾向にあるのに対し，平成１年度から２年度にかけては，7.39ポイントも上昇している。しかし，ここの数値は限度に来ているようである。

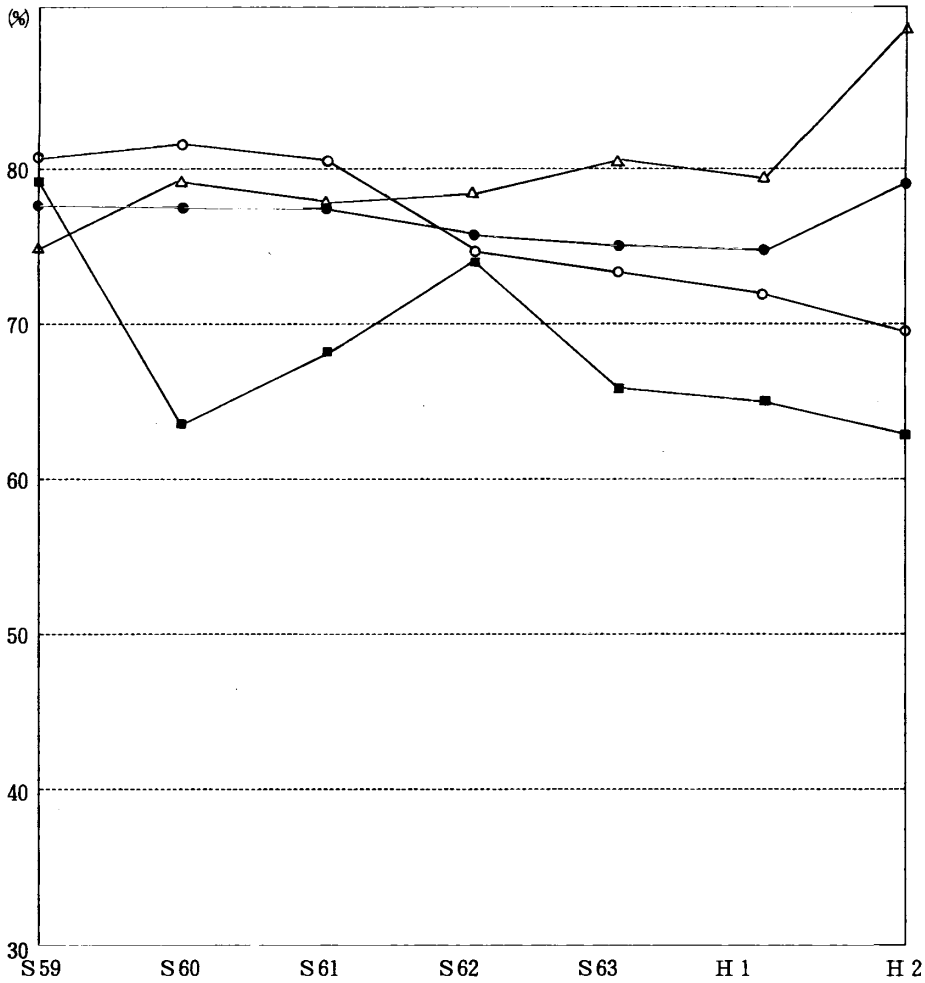
足利市においては，昭和62年度を除くと二市二町の中で常に最低の数値を示している。古くからのこの三クラブだけに頼らず，いろいろなクラブ員が多いことがわかる。こは，市民のスポーツ（クラブ）へのニーズの多様化がみられるからではないだろうか。今後，青年層，壮年層のスポーツへの欲求がどのような方向にあるのか調査をする必要がある。

図12　（野球＋ソフト＋バレー）クラブ員のスポーツクラブ員総数に対する割合　(%)



	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	65.41	67.29	65.86	59.92	59.03	57.80	56.54
葛生町●	60.47	63.29	63.07	61.40	60.67	60.47	62.50
田沼町△	68.57	62.26	61.37	61.17	62.42	60.43	67.82
足利市■	56.73	53.15	59.07	65.43	57.26	56.64	54.67

図13　（野球＋ソフト＋バレー＋ゲート）クラブ員のスポーツクラブ員総数に対する割合(%)



	S 59	S 60	S 61	S 62	S 63	H 1	H 2
佐野市○	80.66	81.45	80.46	74.91	73.52	72.21	69.77
葛生町●	77.80	77.53	77.37	75.80	75.19	74.92	79.05
田沼町△	75.03	79.29	78.15	78.60	80.61	79.52	88.61
足利市■	79.17	63.87	68.18	74.04	66.03	65.14	63.15

(3) （野球＋ソフトボール＋バレーボール）のクラブ員総数に対する割合（図13）

最後に四大派閥のクラブ員数は，総クラブ員数に対してどれくらいの割合を占めているのかを考察したい。これを調べることによりその市・町の日常的スポーツクラブの顔が見えてくる。

圧倒的に高い割合を示しているのが田沼町で，平成２年度をみると88.61パーセントであり，およそ10人中９人がこの四大派閥のどれかに属していることになる。スポーツクラブに入っている家庭を想定すると，極端な言い方をすればお兄さんは野球クラブ，お父さんはソフトボールクラブ，お母さんはバレーボールクラブ，おじいちゃん・おばあちゃんはゲートボールクラブという図式が成り立つ。他のスポーツクラブで活動している人はほとんど目立たない存在になっているのではないだろうか。今後，田沼町がこの状態を維持していくのか，それとも方向転換を図っていくのか，町民の日常的スポーツ活動について意識調査を実施することによりその答えが出てきそうである。

葛生町は，ほとんど増減がなく，最大で４パーセントくらいの間をいったりきたりしている。今後もあまり変化がないように思われる。ただ，高齢化現象が現れているので，高齢者に対する日常的なスポーツ活動の開発・援助，スポーツクラブの育成がキーポイントになってくる。

足利市においては，今後ますますこの四大派閥のクラブ員数の割合が減っていくことが予想されるので，この四大派閥以外のスポーツクラブの扱いをどうしていくかが課題になってくる。

5．おわりに

生涯スポーツの推進が叫ばれている現在，スポーツ活動はスポーツを行う人たちのものであるという原点に立って考えなければならない。また，スポーツを行う目的が多種多様化してきていることから，様々な理由や動機でスポーツを行っている。だれもがスポーツに参加し，地域の中でスポーツが広まって市・町民ひとり１スポーツを推進していくためには，スポーツの持っている楽しさを保障することが大切である。スポーツは，自主的・自発的活動が基本であり，他人から強制されたり，いやいやながら行うものではない。また，スポーツはひとりでもくもくと行うやり方もあるが，仲間で和気あいあいと楽しく行うほうがより日常化し継続が図られる。人間の帰属意識等からも，クラブの中で活動していくほうが豊かな活動に結びついてくる。スポーツの持っている文化性を最大限に生かし単にクラブ数が増えたという量的なことだけでなく，質的な面にも目を向けていくことが重要になる。クラブ活動は，クラブのメンバーの自主的な活動により，一人ひとりがお互いに自分の持っている能力を出し合いながら運営していき，その中で起こる問題をみんなで解決していくことが大切である。

クラブ育成ということは，スポーツ教室や単発的に行われる大会等のような行事とは違って地道な長い援助・指導を必要とするものである。しかし，今これらの育成に取り組むことが，地域に根ざした自主的で自発的なスポーツ活動の展開に結びついていくことになるのではないだろちうか。さらには，市・町民の健康で明るく連帯感あふれる豊かな生活へと発展していくことにつながるに違いない。そのような意味でスポーツクラブ育成に取り組むことは行政に課せられた大きな課題である。

評

これまでの教育論文集には例のない，安足地区という広域的な研究であり，しかも，スポーツクラブ数の推移から，地域スポーツの振興方策を探ろうとする新しい試みのこの研究にまず敬意を表します。

この広域的な研究は，足利市の社会体育行政に対しても，大きく２つの示唆を与えていると考えます。

１つは，他市町との比較により，足利市の実態，傾向が明らかにされていることであり，しかも，単にクラブ員数の実数による比較だけでなく，人口に対する割合（人口比）により比較することで，より鮮明となっています。ともすると，実数の比較だけをとらえて，考察を行うこともありがちですが，このような方法により，都市規模による顕著な特徴や各市町別の傾向が明らかとなっています。これによりますと人口の多い市ほどクラブ員数を増加させていくことが困難であるが，栃木県全体の人口に対する割合11.3％を目標として，具体的な施策をうつ必要があるとしています。

２つ目は，青年層――野球，壮年層――ソフトボール，婦人層――バレーボール，高齢者層――ゲートボール，という既成の愛好者の多いスポーツの割合により，スポーツの多様化へ迫った点であります。これまでは，個々の種目ごとの比較は行われてきましたが，この４大スポーツの合計により割合で，スポーツの多様化への動向をつかもうとする考えは，斬新なものでした。そして，足利市は，早くから市民のスポーツ欲求の多様化が，進んでいるとしています。しかし，この研究が自ら指摘しているとおり，野球・ソフトボール離れしたスポーツ人口が，どこへ行ってしまうのかという，スポーツの種目の多様化に対する問題，あるいは，20～30代で一線を退いた野球選手が，40代，50代，そして，60代のチームを結成し，活動を続けているという現状からスポーツの質，あるいは，対象の多様化等に対する回答を得るためには，社会体育行政を担当している現場での追跡調査，研究等が必要であると思われます。

最後に本研究が，これからの社会体育行政の中に，重要なウェイトを占めるスポーツクラブの研究で，その土台となる考えを示し，さらに，これから進むべき方向へ一石を投じられたことは，大変意義深いことであると考えます。